

MASによる大学生の不安水準およびMPIとの関連
-その後-

柴原 直樹

Anxiety Levels in University Students Measured by
MAS and its Relation to MPI
- A Subsequent Study -

Naoki Shibahara

神戸医療福祉大学紀要 第21巻 第1号

(令和2年12月)

<原著>

MASによる大学生の不安水準およびMPIとの関連
—その後—

柴原 直樹

Anxiety Levels in University Students Measured by MAS
and its Relation to MPI
— A Subsequent Study —

Naoki Shibahara

The purpose of this research is to examine correlations of scores on anxiety measured by MAS with those on two dimensions of personality, Neuroticism (N) and Extraversion (E) measured by MPI. Another purpose is to compare the current results with those obtained by Shibahara (2008). The results observed here were similar to those reported by Shibahara in that anxiety scores were positively correlated with N scores and negatively correlated with E scores, with the former stronger than the latter. However, there were gender differences in E and N scores with the tendency reversed between the current and the previous results. It is suggested that personality types in college students have changed, reflecting social conditions in each period.

Key Words : anxiety, MAS, MPI

不安、顕在性不安尺度、モーズレイ人格検査

はじめに

1960年代に入り、多くの青年が目立った反抗や混乱、不適応を示すことなく平穏化し、彼らの心からがむしゃらさが消失したと言われるに及んで¹⁾、かつてスタンレー・ホールが疾風怒濤の時代と表現した、不安と動揺が特徴的な青年期はもはや古典と化した。

また、1960年から1970年にかけて、アルバイト等には熱中するが、授業にほとんど出席せず期末試験も受けないため留年を繰り返す一群の学生が、スチューデント・アパシーとして問題化するようになった。1980年代に入

ると、形式的な関係や情緒的な深まりのない場面ではソツなくこなせるが、対人関係が深まりより親密な関係に発展する場面で困難を感じる、ふれあい恐怖心性を持つ学生が出現した。最近になって、発達障害あるいはその傾向のある学生の存在が目につき始め、彼らのコミュニケーション能力や行動上の問題が浮上している²⁾。

他方、寺崎³⁾は、MPIを使用して1970年から1984年までの大学生の外向性傾向および神経症的傾向について逐年変化を調べた。その結果、男女とも外向性傾向は増減を繰り返しながら緩やかな高まりを見せているが、神

経症的傾向は減少傾向を示した。

また、持主ら⁴⁾は、SPI (Synthetic Personality Inventory/ 株式会社リクルートマネジメントソリューションズ) を用いて1997年から2007までの十年間の性格傾向の変化を調べた。その結果、神経質で周囲に敏感な傾向を特徴とする敏感性、および不安を感じ悲観的になりやすい傾向を示す自責性が上昇傾向にあることが分かった。

このような大学生の性格的な変化が、それ以後どのような傾向を示しているのであろうか。今や、彼らを取り巻く社会情勢は変革の途にあり、情報通信技術の想像を絶する進歩による生活スタイルの変化には目を見張るものがある。特に、SNSの普及が大学生に与える影響は大きく、SNSを頻繁に利用する学生は自己肯定感を高め⁵⁾、信頼関係や結びつき、共に支え合う傾向が強⁶⁾、キャンパス生活の満足度を高めている⁷⁾といった報告がある一方、憂鬱な気分など精神衛生上の問題等の急増^{8) 9)}や学業成績低下との関連性¹⁰⁾も指摘されている。

そこで、2008年に柴原¹¹⁾が発表した大学生の不安レベルと外向性および神経症的傾向が、その後どのように変化しているのか調べることを目的に、本研究において2015年から2019年までの5年間のデータを分析し、2008年の調査結果と比較する。2008年の調査によると、外向性を測るE得点は男子大学生25.38、女子大学生26.59と若干女性の方が高く、神経症的傾向を測るN得点は男子大学生25.78、女子大学生28.48となっており、女性の方が高いことが報告されている。また、不安尺度との関係を見ると、外向性と負の相関が、神経症的傾向と正の相関が見られた。この関係は1978年に発表された岸本・今田¹²⁾の調査結果と同じであり、Y-G性格検査等の別の質問紙を用いた田中・菅¹³⁾の結果もこ

の関係を支持している。

ところで、2008年はTwitter および Facebook が日本でのサービスを開始した年で、その後2010年にInstagram、2011年にLINEが登場することになる¹⁴⁾。また、ICT総研の調査により、2015年から2019年にかけて日本におけるSNS利用率は65.3%から78.2%と上昇し、急速にSNSが普及していることが示されている¹⁵⁾(図1参照)。

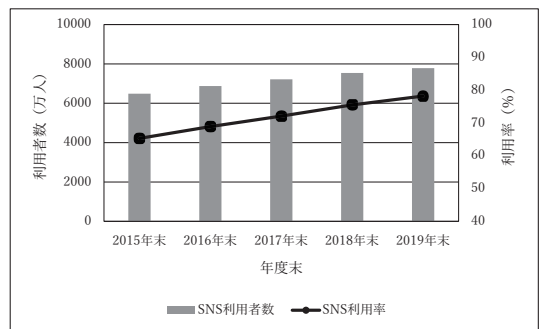


図1 2015年～2019年のSNS利用者数と利用率

方法

1. 調査対象

K大学学生103名(男性36名、女性67名)が本調査に参加した。

2. 質問紙

MAS (Manifest Anxiety Scale) 日本版¹⁶⁾とMPI (Maudsley Personality Inventory) 日本版¹⁷⁾を使用した。MASは、個人が有する身体的・精神的不安を含めた種々の不安を包括的に測定し、その慢性的な不安の程度を評価することを目的に作成された検査である。MMPIから抽出された不安尺度50項目に、妥当性尺度15項目を加えた65項目で構成されている。

また、MPIは外向性(E尺度)と神経症的傾向(N尺度)という二つの性格特性を同

時に測定し、それぞれの尺度得点の組合せによって幾つかの性格像を描き出すことを目的としている。E尺度・N尺度（各24項目）に虚偽発見尺度（L尺度20項目）、および予備項目（12項目）の80項目から成っている。

3. 実施方法と実施時期

2015年から2019にかけて、授業中（4月～5月）に受講生の同意を得てテストを行い、その場で検査用紙ならびに回答用紙を回収した。各受講生に対し、まずMPIを最初に実施し、4週間後にMASを実施した。各質問紙の回答終了後、受講生に対してテストの目的や結果の解釈、データの扱い方等について十分な説明を行った。

結果

無回答（？）数がMASにおいて10以上ある者1名、MPIにおいて20以上ある者3名の計4名、およびMPIにおける虚構得点（L尺度）が21点以上ある6名を合わせた計10名を除いた93名（男性34名、女性59名）がデータ分析の対象となった（表1参照）。

表1 各年度における調査対象者数

年度	2015	2016	2017	2018	2019
人数	19	22	38	11	13

1. MASの分析

MASの平均値（Mean）と標準偏差（SD）を表2に示す。比較のため、この表には柴原¹¹⁾、大村および阿部・高石のデータ（顕在性不安検査使用手引¹⁶⁾より抜粋）も載せてある。また、表3にMASにおける5段階法による得点段階基準を示す。

表2および表3を見ると、1968年と1981年では男女ともに不安水準は普通の範囲内（段階

Ⅲ）にあるが、2008年において不安は男性でやや高く（段階Ⅱ～Ⅲ）、女性では非常に高いレベル（段階Ⅰ）にあることが分かる。今回の調査では、逆に男性が高い不安レベル（段階Ⅱ）にあり、女性はやや高いレベル（段階Ⅱ～Ⅲ）に落ち着いている。

21世紀に入り、いじめや不登校の増加といった学校における問題だけでなく、児童虐待、ニグレクト、DVといった家庭における問題、さらにはハラスメントといった職場における問題が深刻化し、心のケアが強く求められるようになった。また、実際に心のケアによる支援を受けた生徒、あるいはケアを必要とした友人や知人などと接する機会を持った生徒が、大学で心理学や精神保健学を専攻するケースも少なくない。柴原¹¹⁾および本調査で不安のレベルが高いのはこのような要因が関係しているのかもしれない。調査対象となる学生の専攻領域をさらに広げた今後の調査研究が待たれる。

表2 MASにおける不安尺度の平均値（Mean）と標準偏差（SD）

MAS	本調査	柴原 (2008)	大村 (1981)	阿部・高石 (1968)
	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)
男子大学生	24.0 (8.3)	22.7 (7.7)	20.9 (8.7)	17.8 (7.4)
女子大学生	23.7 (8.6)	27.3 (8.6)	22.6 (8.0)	17.8 (7.6)

表3 MASにおける5段階法による得点段階基準

段階	点数範囲
I	27以上
II	23-26
III	14-22
IV	13-10
V	9以下

2. MPIの分析

本調査結果および柴原¹¹⁾による、MPIにおけるE尺度、N尺度およびL尺度の平均

値 (Mean) および標準偏差 (SD) を表4に示す。

本結果は、柴原¹¹⁾ と比べ E 尺度において、男性で5.0、女性で4.2減少しており、N 尺度では、男性で2.1、女性で3.7減少している。また、L 尺度においては男女とも両結果に変化はほとんど見られない。

E 尺度と N 尺度は相関しないと言われているが¹⁸⁾、柴原¹¹⁾ および本調査において男性では有意な相関は見られなかったが（それぞれ、 $r = -.228, p > .05$; $r = -.184, p > .05$ ）、女性に有意な負の相関が見られた（それぞれ、 $r = -.472, p < .05$; $r = -.281, p < .05$ ）。つまり、女性の場合、神経症的傾向が高くなると、より内向的になることが示された。

MAS の不安得点と MPI の E 尺度および N 尺度の得点との相関を調べてみると、N 得点と有意な正の相関 ($r = .722, p < .01$)、E 得点と有意な負の相関 ($r = -.325, p < .01$) が見られた (表5参照)。これは、柴原¹¹⁾ の結果と一致する。

そこで、MPI の E 尺度および N 尺度を説明変数、MAS の不安尺度を目的変数とする重回帰分析 (強制投入法) を行ったところ、外向性および神経症的傾向とともに不安レベルに影響を及ぼしていることが分かった (表6参照)。特に、神経症的傾向は不安感の重要な要因となっているといえよう。

3. MAS と MPI の関係

表4 MPIにおけるE、N、L尺度の男女別平均値 (Mean) と標準偏差 (SD)

MPI		E 尺度	N 尺度	L 尺度
		Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)
本研究	男子大学生 (34名)	20.4 (11.6)	23.7 (10.9)	11.6 (5.7)
	女子大学生 (59名)	22.4 (11.7)	24.8 (11.5)	10.5 (5.2)
柴原 (2008)	男子大学生 (37名)	25.4 (12.2)	25.8 (11.9)	11.2 (4.8)
	女子大学生 (27名)	26.6 (9.2)	28.5 (10.4)	10.7 (4.9)

表5 MASの不安得点とMPIのEおよびN得点との相関

被検者群	人数	MAS (不安尺度)	
		MPI (N 尺度)	MPI (E 尺度)
本研究	93名	.72**	-.33**
柴原 (2008)	64名	.73**	-.26*

* $p < .05$, ** $p < .01$

表6 E得点・N得点を説明変数、不安尺度を従属変数とした重回帰分析

$F(2,90) = 53.931, p < .001$			
$R = .738$			
$R^2 = .545$			
	β	t	p
N 尺度	.683	9.327	.001
E 尺度	-.159	-2.173	.032

考察

2008年のMASおよびMPIに関するデータと2015年から2019年までの平均データとを比較することで、大学生の性格における変化を調べた。

MASにより測定された不安水準は、男子大学生でやや高い段階から高い段階へと上昇したが、逆に女子大学生では非常に高い段階からやや高い段階へと下降した。いずれにせよ、1968年の阿部・高石、1981年の高石によるMASを用いた調査と比べると高い不安水準にあることが分かる。

藤井¹⁹⁾は、1998年のデータをもとに不安の3因子として日常生活不安（大学生活において一般に感じる不安）、評価不安（他人の評価に対する不安）、大学不適応（大学に対する不適応感）を特定している。また、男子学生に比べ女子学生の方が不安を強く感じており、学年が上がり大学生活に馴染むにしたがって不安感は減少する傾向にあることを報告している。それに対し、持主⁴⁾は1997年から2007年までの10年間のデータを調査し、不安傾向と関係する自責性が男女とも継続的に上昇傾向にあることを見出した。

1998年は、日本の年間自殺者数が前年より8000人以上増加し3万人を超えとなった年であり、その前年はいわゆる「14歳の少年による酒鬼薔薇事件」で世間を騒がした年でもある。2000年に入ると、児童虐待・少年犯罪が深刻化し、2002年には刑法犯認知件数が戦後最悪の285万件を記録した。また、ストーカー規制法（2000年）やDV防止法（2001年）が施行され、2003にはSARSが流行し社会は不安に揺れた。2000年代後半には「いじめ自殺」が各地で勃発し学校教育の在り方が問われた。このような社会情勢にあって、不安感が高まるのも当然と言えよう。

正木²⁰⁾が指摘しているように、即時的に情報を共有することでできるオンラインの人間関係が、たとえ強いつながりが無くとも気楽にコミュニケーションがとれ、安心感を与える居心地のよい空間を提供すると考えるなら、本研究で見出された女子学生における不安傾向の低下はSNSの普及が影響しているとの解釈も可能である。この点は、性差も含めてさらに検討する必要がある。

他方、MPIによる外向性および神経症的傾向については、1978年の岸田・今田のデータも含めると、男女ともに減少傾向にあることが分かる（図2a・図2b参照）。つまり、男女とも神経症的傾向は減少し、より内向的な傾向を示している。ただし、両者の間に有意な負の相関が認められるのは女子学生のみである。オフラインでの社会的ネットワークの欠如をオンラインでの対人関係が補償（compensation）するという点で、SNSは不安や孤立から人を守ると言われている²¹⁾。特にオフラインでの関係が希薄な人は、SNSを使用することで彼らの内向性を補償しているとの報告がある^{22) 23) 24)}。このように考えると、本研究で示した神経症的傾向の減少化と内向性への傾向は、補償効果によるものかもしれない。この点についても検証する必要がある。

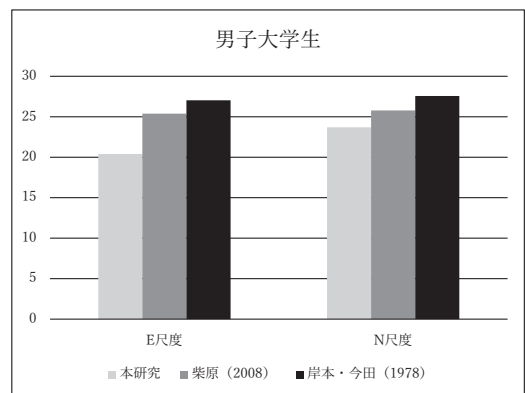


図2a 各研究における男子大学生のE尺度およびN尺度

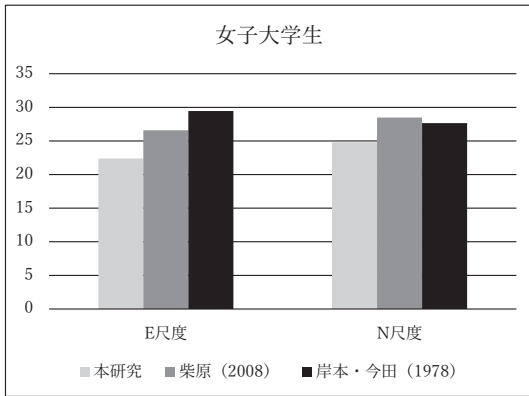


図2b 各研究における女子大学生のE尺度およびN尺度

MASとMPIの関係を見ると、柴原¹¹⁾と同様、不安水準は神経症的傾向と有意な正の相関が、外向性と有意な負の相関が見られる。また、不安水準には神経症的傾向の要因が強く働いていることも分かった。この神経症的傾向は遺伝子的にも不安感と関連していることが指摘されている²⁵⁾。

Eysenckは、E尺度とN尺度を低い(-)、普通(0)、高い(+)の3つのレベルに分け、それぞれの組合せから9の性格像を考案した(E⁻N⁻, E⁻N₀, E⁻N⁺, E₀N⁻, E₀N₀, E₀N⁺, E⁺N⁻, E⁺N₀, E⁺N⁺)。表7から分かるように、E尺度のレベルに関わらず、N尺度が+ (神経症的傾向が高い) の場合、全て不安の段階がI (非常に不安が高い) に属している。ここからも、不安と神経症的傾向との強い関係が読み取れる。

現代の青年の友人関係のあり方は、円滑で

うまく付き合っていくことを望んではいませんが、お互いの距離が縮まるような深い関係になるのはなるべく避けたいという傾向があり²⁰⁾、この性格傾向がSNSとぴったり当てはまった。SNSは学生のコミュニケーションに変革をもたらし、そのポジティブな点も指摘されてはいるが、頻繁に利用することで社会的適応力の低下を生み、一部でネット依存やゲーム依存、あるいは抑うつという病的状態を作り上げてきている。

他方、SNSの普及は大学の教育現場にも変化をもたらした。これまでは、教員が授業の内容を黒板に板書し、学生はそれをノートに書きとる。場合によっては、学生の私語に教員は悩まされることもあった。しかし最近では、教員はパワーポイントを使って授業内容を提示し、学生はスマートフォン等の通信機器のカメラ機能を使ってそれを写し撮る。授業を聞かない学生はスマートフォンをひたすら操作し続け、私語はほとんどなくなったが学力の低下を懸念する声も聞かれる。

今後は、MASやMPIで測定された性格傾向だけでなく、その他のテストで測定された性格特性とSNSの関係について体系的に調査することが望まれる。

参考文献

- 1) 杉原保史：「平穏な青年期」を生きる青年の諸相。京都大学カウンセリングセンター紀要, 30, 23-36, 2001

表7 E尺度のレベルとN尺度のレベルの組合せにおける人数 (括弧内は不安水準)

E尺度	N ⁻	N尺度		
		N ⁻	N ₀	N ⁺
	E ⁻	13 (20.0)	12 (24.6)	15 (30.9)
	E ₀	7 (19.6)	7 (18.7)	11 (30.5)
	E ⁺	15 (17.3)	6 (15.0)	7 (34.7)

* -は低い、0は普通、+は高い

- 2) 森田美弥子：大学生における青年期心性の変化とその支援－学生相談の視点から. 名古屋大学高等教育研究, 21, 93-106, 2018
- 3) 寺崎正治：パーソナリティ・テストを通してみた大学生の性格特性の逐年変化. 人文論究, 35 (1), 144-164, 1985
- 4) 持主弓子・柚木さおり・藤田彩子・舩田博之：大学生の過去10年の性格傾向変化. 産業・組織心理学学会第24回大会, 2008
- 5) Gentile, B. C., Twenge, J. M., Freeman, E., Campbell, W. K.: The effect of social networking websites on positive self-views: An experimental investigation. *Computers in Human Behavior*, 28 (5) :1929-1933, 2012
- 6) Ying Liu, Yea-Ru Tsai: The impact of social networking services (SNS) on college students' social relationship and private life. *International Journal of Arts and Commerce*, 1 (4), 1-10, 2012
- 7) Kim, Y., Kim, B., Ha-Sung Hwang, Lee, D.: Social media and life satisfaction among college students: A moderated mediation model of SNS communication network heterogeneity and social self-efficacy on satisfaction with campus life. *The Social Science Journal*, 57 (1), 85-100, 2020
- 8) Steers, M. L. N., Wickham, R. E., Acitelli, L. K.: Seeing Everyone Else's Highlight Reels: How Facebook Usage Is Linked to Depressive Symptoms. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 33 (8), 701-731, 2014
- 9) Twenge, J. M.: Have Smartphones Destroyed a Generation? *The Atlantic*, September issue, 2017
- 10) Gok, T.: The Effects of Social Networking Sites on Students' Studying and Habits. *International Journal of Research in Education and Science*, 2 (1), 85- 93, 2016
- 11) 柴原直樹：MASによる大学生の不安水準およびMPIとの関連. 近畿医療福祉大学紀要, 9 (1) , 85-89, 2008
- 12) 岸本陽一・今田寛：モーズレイ性格検査(MPI)に関する基礎調査, 人文論究, 28 (3) , 63-83, 1978
- 13) 田中存・菅千索：大学生生活不安に関する心理学からのアプローチ. 和歌山大学教育学部紀要教育科学, 57, 15-22, 2007
- 14) 青山征彦：大学生におけるSNS利用の実態－使い分けを中心に. *社会イノベーション研究*, 13 (1), 1-18, 2018
- 15) ICT 総研：2020年度 SNS 利用動向に関する調査. 2020年7月29日発表 <https://ictr.co.jp/report/20200729.html>
- 16) 阿部満州・高石昇：顕在性不安検査使用手引. 三京房, 1968
- 17) MPI 研究会 (訳編)：モーズレイ性格検査手引. 誠信書房, 1964
- 18) Eysenck, H. J. : A short questionnaire for the measurement of the two dimensions of personality. *Journal of applied Psychology*, 42, 14-17, 1958
- 19) 藤井義久：大学生生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討. *心理学研究*, 68 (6), 441-448, 1998
- 20) 正木大貴：SNSは人間関係を変えたのか？京都女子大学現代社会研究科論集, 13, 123-136, 2019
- 21) McKenna, K. Y. A., Bargh, J. A.: Causes and Consequences of Social Interaction on the Internet: A Conceptual Framework. *Media Psychology*, 1, 249-269, 1999
- 22) Barker, V.: Older adolescents' motivations for social network site use: The influence of gender, group identity, and collective

- self-esteem. *Cyberpsychology, Behavior, and Social Networking*, 12, 209-213, 2009
- 23) Mehdizadeh, S.: Self-presentation 2.0: Narcissism and self-esteem on facebook. *Cyberpsychology, Behavior, and Social Networking*, 13, 357-364, 2010
- 24) Zywicki, J., Danowski, J.: The faces of Facebookers: Investigating social enhancement and social compensation hypotheses: Predicting Facebook and offline popularity from sociability and self-esteem, and mapping the meanings of popularity with semantic networks. *Journal of Computer-Mediated Communication*, 14, 1-34, 2008
- 25) Savage, J. E., Jansen, P. R., Stringer, S., et al. : Genome-wide association meta-analysis in 269,867 individuals identifies new genetic and functional links to intelligence. *Nature Genetics*, 50, 912-919, 2018